

読賣新聞

2005年(平成17年)7月15日 金曜日

プレート境界で強い地震波

横須賀直下に固着域

過去にマグニチュード8級の大地震を繰り返し起こしてきた首都圏直下のプレート(岩板)の深さが、これまで考えられていたより最大17キ・メートル浅い地下4〜26キ・メートルにあることが、東京大学地震研究所などのグループの調査でわかった。大都市の地下30キ・メートル近い地殻構造を正確に計測できたのは世界初で、15日付の米科学誌サイエンスに発表する。

このプレートは、本州の南側から陸の下にもぐり込んでいるフィリピン海プレート。研究グループでは2002年以降、房総半島などの地上や東京湾などの海

上から、地下に人工的な地震波を反射させる探査法で同プレートの深さを計測してきた。プレートの深さはこれまで、微小な地震が多数発生している領域から推測していた。

計測の結果、東京や埼玉の西部などではプレートのもぐり込む角度が緩やかで、深さが従来の推測より5〜17キ・メートル浅いことが判明した。またプレートの境界で強い地震波を発生させる固着域(アスペリティ)はこれまでどこか所あると推測されていたが、うち神奈川県三浦半島南沖とみられていた1か所は同県横須賀市周辺の直下とわかった。

